東海新報　平成21年(2009年)3月8日（日曜日）

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部 創立10周年に寄せて ㉘

リレーエッセイ

「五葉山ピラミッド」

大船渡市猪川町　小笠原　幸男

高校二年の夏、初めて五葉山に登った。そこには、遠景に感動する石川啄木的世界よりも、現実を直視する宮沢賢治的世界が広がっていて、一種の意識革命と言ってもいい体験が待っていた。友人と二人、通称・黒岩まで、途中何度も座禅を組み、心酔したことか。二人はどこまでも無垢だった。

爾来、何度五葉山に登ったことか。日枝神社への元朝詣だけでも連続二十六回は登っている。友は、私が独り忌日に花を捧げることを忘れない人になってしまった。

顧みるに、山が私たちを惹きつけて離さない魅力のひとつに、そこには「ロマン」があるからだと思う。かけがえのない友との友情、そして愛情。日常生活では体験できない純真な心、そして哄笑。ちょっぴり不可思議な世界等……。

学習研究社版の人気月刊誌『ムー』に紹介され、一躍有名になった「五葉山ピラミッド」は不思議な雰囲気が漂う空間である。山容も通称・五葉六峰と呼ばれているが、仮に第一峰を山頂、第六峰を黒岩と呼んでみる。

日枝神社から風薫る五葉六峰を振り返ってみよう。第三峰の五葉山神社が微かに眺望できる。北上山系第二の高峰にふさわしい、なだらかな山容が登山者を優しく迎えてくれる。

だが、第四峰から南西に延びる稜線は山容を一変させる。花崗岩の巨岩が山稜を覆い尽くす険し

通称「奥の院」と呼ばれる謎の石組み。ピラミッドの祭殿の跡か？

い岩稜地帯となる。それは、古代より多くの修験者や文人碩学の鍛錬修行の場であった名残を今にとどめている。

『神秘の日本』の著者・酒井勝軍によって調査されたという五葉山ピラミッドの石組みも、きっと神秘とロマンの世界に足を踏み入れさせてくれるに違いない。

第四峰に近づくにつれ、石組みは正確に北を指す。

『神秘の日本』の中で酒井は、ピラミッドの日本発祥説を唱え、日本中を歩き回り辿りついた先が五葉山だった。やがて、ハルマゲドン（最終戦争）を見、神秘の宝剣を神授されたという。

簡単に言うと、人類生存の危機が訪れた時、偉大な力を発揮して人類を救うために創造されたのが「五葉山ピラミッド」だというのである。

また、ピラミッド付近には二十畳ほどの石室があり、かつて文人碩学の修行の場所だったという。そして、その石室の中には金でできた幣束（へいそく）が手向けられていたというが、盗人に盗まれたという。

実際に古老から聞いたことがあるという人もおり、金の幣束はともあれ石室については信憑するに足ると思われる。しかし、もうすでに草や木が生い繁り容易に見つかってはいない。

何しろ修行僧が闊歩した時代から千年以上も経っている。それにそう簡単に見つかっては「ロマン」がない。

我々は日常生活や多忙さの中に、ともすると我を忘れかけているもう一人の自分がいるのに気づくことがある。そういう時は、神秘の世界へ足を踏み入れてはどうでしょうか。

荒唐無稽と見える世界も、真実みを帯びて見えるから不思議です。そう思って住田町世田米付近から六峰を仰げば、屹立（きつりつ）する二つの頂（いただき）を抱えて悠然と鎮まっている姿は、まさにピラミッドではないか。

「四峰以上は金山ピラミッドさ」――酒井の声が聞こえたような気がした。

【執筆者プロフィール】大船渡市猪川町在住、六十六歳。ヨーロッパアルプスを登山。年間を通じて五葉山に登山している。「しゃくなげ山想会」代表。